戦艦大和の歴史

5.「大和」が語る命の尊さ

乗組員たちは、沖縄海上特攻に際し、手紙・葉書などに家族への思いを託し出撃していきました。ここでは、名村利雄１等兵曹の両親に向けた遺書を、分かりやすい言葉で紹介します。

ご両親様　お元気でお暮らしの事でしょうね。
私も元気で母港に入港いたしました。いよいよ19日に出港し、○○（※）へ入港することとなり、今度はいつ母港に帰ることができるかわかりません。二度も電報を打って誠にすみませんでした。
今度は無事に帰れるかどうかわかりませんので、一筆啓上します。
（中略）
軍人、一度戦争に出たなら、命はないものと同じです。
私も、死んだ後にご迷惑をかけることのないよう、身辺整理はしておきましたから、私の死の知らせが届いた時は、どうか悲しまず、気をたしかに持って、私の遺骨を待っていてください。これが私の頼みです。
（中略）
では、さようなら。

※軍艦の具体的な場所を手紙で知らせることができないので「○○」と表記していました。

名村利雄１等兵曹は、戦艦「大和」に１番主砲塔員として乗艦、沖縄海上特攻に参加し、戦死しました。その当時、21歳でした。

▲名村利雄１等兵曹

戦艦大和の歴史

「大和」潜水調査

これまでの潜水調査によって、「大和」の現在の姿をとらえることができました。「大和」は①　　沖の水深350mの海底に眠っています。

▲海底に眠る「大和」のＣＧ再現（平成28年調査）

船体は大きく３つに割れ、破片が広範囲に散らばっていることが分かりました。
爆発の激しさがうかがえます。

また、昭和60（1985）年、平成11（1999）年の調査では、遺品の引き揚げを行いました。

引き揚げ遺品

▲どんぶり

▲ラッパ

▲靴底

いずれの遺品も、平成11年の調査によるもの